

オリンピックピッチャーの夏休み

愛知淑徳学園理事長・学園長

小林素文

今年の夏は猛暑。夏休みの前半は連日熱中症警戒アラートがでて、外出もままならず、もっぱらパリオリンピックを観戦する日々でした。

金メダルの夢をかなえるため全身全霊で戦う選手たち。その結果、夢をかなえる選手あり、あともう一步の選手あり、夢が砕け散った選手あり。それぞれに感動するのは、選手たちが悔いのない努力をして、

別の言い方をすれば、人事を尽くして勝負の場にたつた結果だからなのでしょう。

オリンピックの最中に、かつて2度ほど見た映画『フィールド・オブ・ドリームス』がBSで放映され、なつかしく再見しました。映画には実在の元メジャーリーガーの野球選手ムーニャイト・グラハムが登場します。



夏のキャンパス

探し求めようやく出会えたグラハムに主人公が「あなたの夢は何だったのですか」と尋ねると、グラハムは「メジャーリーグで打席に立ち、ピッチャーを睨みウイंकする。打って、果敢に三塁に滑り込み、ベースを腕で抱え込む」と答えます。

現実には、ようやくメジャーに昇格したグラハムに出場機会が訪れ、8回から守備につき、9回初めての打席がまるる直前にゲームセット。翌日マイナーへの降格を告げられたグラハムは、メジャーリーグでたった一イニングの出場、一度も打席に立つことなく、野球選手の道をあきらめます。

グラハムは主人公にこう語ります。「夢がかなうまであとこれくらいだった。だが、夢は肩をかすめ歩み去った」

グラハムは、その後医者となり、故郷の町で信頼され感謝される人生をおくります。グラハムが最後に主人公に語ります。「夢は夢のまま終わるのさ、私はここで生まれ、悔いなくここで死ぬ」
何度聞いてもこのセリフは心に響きま
す。夢がかなわなくとも、悔いなく人生の
終わりを迎えようとしているグラハムは
素晴らしい。

「人事を尽くして天命を待つ」

生きていけば、いろいろなことがおきます。その一つひとつに誠実に向き合い、悔いなく生を全うしたいものです。

生徒・学生さんには、自分らしい目標や夢を抱き、最善の努力を重ねていただきたい。その努力が実れば自信となり、次の目標が生まれましょう。たとえかなわなくとも、人事を尽くした結果なら、また道は開けましょう。

「後悔しないで。良いことなら素晴らしい。悪いことなら経験。(Never regret. If it is good, it is wonderful. If it is bad, it is experience.)」

これは、200冊以上の本を出版し、20以上の言語に翻訳され、1億部以上を売り上げたイギリスの流行作家エリーナ・ヒバート(Eleanor Hibbert)のことばです。

酷暑の夏でしたが、集まり散じて盆が過ぎゆくと、朝夕にひぐらしが鳴き、夜には虫の音が聞かれるようになりました。

盆過ぎの無間に広き家屋敷(野中足世)
盆過ぎて蝉鳴く天の雲明かり(飯田蛇笏)